

## シベ語における「非現実」と知識管理

児倉 徳和

koguran@aa.tufs.ac.jp

キーワード： 非現実 知識管理 活性化 補助動詞 シベ語 (ツングース諸語)

### 要旨

本論では、習慣、未来や意志といったシベ語において非現実 (irrealis) として表される事態に関する知識の、言語主体の知識領域 (記憶) におけるステータスについて論じる。証拠性や認識性に関するこれまでの研究では言語主体の知識領域で生起する、いくつかの情報と知識の心的操作が提案されてきた。その中の一つとして Chafe (1973, 1994) により提案された活性化が存在する。シベ語でも児倉 (2013a, b) により、モダリティ接語 =ne が言語主体の知識領域に存在する知識の活性化を表すとされている。しかし、モダリティ接語 =ne は動詞の完了形や非完了形には後続するにも拘らず非現実形には後続しない。この現象を基にすると、シベ語において活性化の心的操作を受けることのできる知識は現実の事態に関するものに限られ、非現実の事態に関する知識は活性化の操作を受けないと考えられる。本論ではこの仮説に基づき、シベ語における、非現実の事態に関する知識の心的なステータスについて論じる。そして、過去の習慣に関する知識は、過去における個別的な習慣的行為の実現として、また未来の事態に関する知識は意志や予定の形で、それぞれ知識領域に存在すると結論付ける。

### 1. はじめに

本論では、シベ語<sup>1</sup>において事態の現実性 (非現実 irrealis と現実 realis の対立) に関わる諸形式の意味分析を通し、シベ語における事態の現実性と知識の関わりについて論じる。特に、実現していない事態に関する知識・情報が話し手の心内でどのような状態にあり、どのように処理されているかを、シベ語の非現実形 V-re と V-mi の振る舞いの特異性を基に論じる。

シベ語には以下表 1 に掲げるアスペクト・ムードを表す動詞接辞が存在する。表中、上段の形式がアスペクト・ムードを表す接辞であるが、主節末では後で述べるモダリティ接語 =i が

<sup>1</sup> シベ語は中国・新疆ウイグル自治区チャブチャルシベ自治県 (察布查爾錫伯自治県) およびイーニン市 (伊寧市) を中心に話される満洲=ツングース諸語の一つである。本論におけるシベ語のデータは 1943 年生、チャブチャルシベ自治県第 4 ニル (第 4 郷) 出身の話者に対する調査により得られたものである。著者の調査への献身的なご協力に対し、この場をお借りして感謝申し上げる。

本論におけるシベ語の表記は特に言及のない限り Kubo (2008) および久保ほか (2011) に倣い以下の音素表記を用いる：子音/p, t, c, k, q, b, d, j, g, ʒ, K, f, s, š, x, ɣ, X, ž, m, n, ŋ, N, r, w, y, l/, 母音/a, e, i, o, u/. /K/と/X/はそれぞれ/k/と/q/, /ɣ/と/ɣ/の対立が中和した原音素を表す。また, /l/は有標のアクセントを表す。#は漢語要素において音韻的な語境界に相当する音節境界を表す。例文頭の ? は、文が容認はされるものの、他により自然な形式が存在することを表し、?? は文が当該の状況で容認されないことを表し、\* は文が文脈によらずに容認されないことを表す。その他の略号の一覧は本文の末尾に附す。

後続した形式で現れることが多いため、下段にモダリティ接語 =i が後続した形式 (後では i 形と呼ぶ) も掲げている。

表1 シベ語のAspect・ムードを表す動詞接辞 (括弧内は否定の形式を表す)

	完了 perfective	非完了 imperfective
現実 realis	-Xe <sup>2</sup> (-Xaqu) -Xe=i (-Xaqu=i)	-maxe (-maxaqu) -maxe=i (-maxaqu=i)
非現実 irrealis	-re <sup>3</sup> (=qu) -mi (=qu=i)	

シベ語にはまた、動詞などに後続してモダリティ、特に言語主体の心内で生起する情報・知識の操作管理 (以下知識管理と呼ぶ) を表すモダリティ接語 =i と =ŋe が存在する。以下の表2は動詞の各Aspect・ムード形式にさらにモダリティ接語が後続した形式をまとめたものである。表中、動詞の各Aspect・ムード形式にモダリティ接語 =i が後続した形式を i 形、モダリティ接語 =ŋe が後続した形式を ŋe 形と呼び、以下でもこの呼称を用いる。また、モダリティ接語は動詞のAspect・ムード形式に義務的に後続するのではなく、動詞のAspect・ムード形式にモダリティ接語が後続しない形式も存在する。この形式を以下単独形と呼ぶ。

表2 動詞のAspect・ムード形式とモダリティ接語の組み合わせ

(括弧内は否定の形式を表す)

		i 形	ŋe 形	単独形
現実 realis	完了 perfective	V-Xe=i (V-Xaqu=i)	V-Xe=ŋe (V-Xaqu=ŋe)	V-Xe (V-Xaqu)
	非完了 imperfective	V-maxe=i (V-maxaqu=i)	V-maxe=ŋe (V-maxaqu=ŋe)	V-maxe (V-maxaqu)
非現実 irrealis		V-mi (V=qu=i)	V-re=ŋe (V=qu=ŋe)	V-re (V=qu)

本論では特に、非現実の ŋe 形 (V-re=ŋe, V=qu=ŋe) が主節末において一般に現れない、つまり動詞の非現実形には一般にモダリティ接語 =ŋe が後続しないという現象を基に、シベ語に

<sup>2</sup> 完了接辞 -Xe は一部の動詞語幹において -Ke (否定 -Kaqu) という形式をとる。これは、共時的には音韻的に条件付けられていない異形態である。

<sup>3</sup> 本論では非現実のAspect形式は -re であり、-mi は -re にモダリティ接語 =i が後続した形式に相当する、と考える。非現実の形式は完了・非完了と異なり、少なくとも直接的にはモダリティ接語 =i を分析することができないが、これは歴史的変化によるものと考えられる。

において現実—非現実という事態の現実性がどのように知識管理と関わっているか、という問題を扱う。そして結論として、シベ語において、非現実の事態に関する知識はモダリティ接語 =ŋe が表す、心的データベースからの読み出しという操作を受けることができないこと、そして非現実に関する知識は、一つは過去に生じた個々の事態として、もう一つは未来に生起する事態に関する意志ないし予定として、心的なデータベースに登録されていると述べる。

## 2. 事態の現実性と知識管理

### 2.1 事態の現実性と話者の認識

本論に入る前に、事態の現実性 (reality) と言語主体の持つ知識の関係についての先行研究の議論を見ておく。事態の現実性が話者の認識と表裏一体の関係であることは Chafe (1995) や Mithun (1999) 等のモダリティの議論において言及されている。Mithun (1999) は北米諸言語における現実 (realis) —非現実 (irrealis) の文法的対立について、事態が現実のものとして実現したものであるか、あるいは純粹に思考の中の存在であるか、という事態の現実性と、直接的な知覚を通して知ることが可能か、あるいは想像によってのみ知ることが可能か、という経験の仕方の違いという二つの側面から以下のように述べている。

A grammatical distinction that appears in a number of North American languages is that between realis and irrealis. The realis portrays situations as actualized, as having occurred or actually occurring, knowable through direct perception. The irrealis portrays situations as purely within the realm of thought, knowable only through imagination.

(Mithun 1999:173)

事態の現実性が話者の認識のあり方に影響を及ぼすことは、証拠性 (evidentiality) の枠組みでも論じられている。Aikhenvald (2004) は証拠性の体系を類型論的に論じたものであるが、その中で過去と非過去における証拠性の対立の違いについて述べている。そして Aikhenvald (2004: 263-264) では類型論的に見た証拠性の体系について、証拠性の対立が過去のテンスにのみ存在し、非過去のテンスでは証拠性の対立がないという現象を紹介している。このことから、実現した現実の事態であるか否かという事態の現実性が言語主体の認識のあり方と関わっており、さらにこのような認識のあり方の違いは文法体系にも現れることが分かる。

### 2.2 知識管理—言語主体の知識とその心的な管理操作

次に、本論で仮定する知識管理 (knowledge management) という概念について述べる。2.1 で見たように、Aikhenvald (2004) は証拠性を言語主体が獲得する情報の来源を表す文法範疇であると定義しているが、これに対し、Chafe (1986) は証拠性を、言語主体が獲得する情報の来源のみならず言語主体の心内で生起する情報・知識の管理操作をも含む文法範疇として定義している。Chafe (1986) も Aikhenvald (2004) における情報の来源に対応して、知識の来源 (source of

knowledge) と知識獲得の方法 (mode of knowing) の区別を仮定しているが、Chafe (1986) はさらに、知識の信頼性 (reliability), および情報と既存の知識との関係, という要素も含んだものとして証拠性を定義している。Chafe (1986) による証拠性の定義は、新規の情報と、言語主体の心的領域に既存の知識の照合という心的操作の存在を仮定していると考えられる。

新規の情報と言語主体の心的領域に既存の知識の照合という心的操作は他の論考でも仮定されている。日本語の証拠推量表現「ようだ」と「らしい」を知識管理の観点から論じた齊藤 (2006) は、言語主体の知識が蓄積され処理をうける知識領域を、知識が蓄積される知識データベースと、新規の情報と関連する既存の知識が一時的に置かれるバッファの2つの領域からなるものと仮定し、さらに外部の情報が知識データベースに登録される際に行われる処理を以下のように仮定している。

- (1) ①外部情報が命題の形でバッファに入力される。
- ②その命題の但し書き部に情報源が付加される。
- ③その命題と関連する命題が知識データベースからバッファに呼び出される。
- ④バッファ内の命題が矛盾をきたさないかチェックされる。
- ⑤矛盾が見つかったら、但し書き部を参考にしながら、矛盾の解消がはかれる。
- ⑥矛盾がなければ、新規情報を知識データベースに登録する。

齊藤 (2006) は、言語主体が新規の情報を知識として獲得する際、既に知識として持っている命題を読み出し (呼び出し), 相互に矛盾がないかのチェックを行う, というプロセスを仮定している。このうち、新規の情報を既存の知識と照合する, というプロセスは、既に見たように Chafe (1986) でも仮定されているが、既存の知識の読み出しも Chafe (1973, 1994) により仮定されている。

Chafe (1973) は言語主体の記憶を表層記憶, (surface memory), 浅層記憶 (shallow memory) と深層記憶 (deep memory) に分類し、言語主体が獲得した情報は一定の時間の経過を経て表層記憶から浅層記憶を経て深層記憶に変化 (移動) するとしている。また、これらの記憶のうち特に浅層記憶と深層記憶は活性化 (activation) という心的操作を受けるが、それぞれ活性化のコストが異なり、それが時間副詞の位置という統語的な差異として観察可能であると述べている。また Chafe (1994) は、このような活性化の心的プロセスに基づき、心内の知識に活性 (active), 半活性 (semi-active) および不活性 (inactive) という活性状態 (activation state) の区別を認めている。このように、新規の情報と既存の知識の照合や、心内に既存の知識の活性化といった情報・知識の心的操作を仮定することは、言語形式の分析において有効である。

### 2.3 知識の種類と管理操作の制約

2.2 で見たように、Chafe (1973, 1994) や齊藤 (2006) によれば、心内に存在する知識は読み出し、ないし活性化 (activation) という心的操作を受けるとされる。しかし、心内に存在する

知識が等しく活性化という心的操作を受けるわけではないと考えられている。言語形式の意味を談話において発話参加者の心内で生起する情報・知識の処理との関係から分析する枠組みとして、田窪・金水による談話管理理論も存在する。田窪・金水 (1996) は知識領域に長期記憶とリンクされ、直接経験に基づく情報が格納された D 領域、と、直接経験に基づかない、推論や伝聞に基づく知識が格納された I 領域という区別を設け、D 領域の要素のみ直示的指示が可能であると述べている。このように、先行研究では知識領域に存在する情報・知識の中に活性化や直示的指示という心的操作を受けることができるものとそうでないものの区別が認められている。

これらの先行研究に基づき、本論でも、心的領域に存在する情報・知識の中に活性化や直示的指示に相当する心的操作を仮定する (本論では、3.2 で見るように知識データベースからの読み出し、と呼ぶ)。また、心内に存在する知識の中に活性化の心的操作を受けることができるものと、受けることのできないものの両方が存在すると仮定する。そしてこのような仮定に基づき、シベ語における知識管理について論じる。以降の議論を先取りすると、シベ語の場合、習慣や未来の事態、主語の意志といった、非現実の事柄に関する知識は活性化の心的操作を受けないと考えられるが、この現象を通じ、シベ語において非現実の事柄に関する知識が心内においてどのように処理されているかを言語形式との関係から論じるのが本論の目的である。

### 3. シベ語のアスペクト・ムード接辞とモダリティ接語

#### 3.1 アスペクト・ムード接辞

本論に入る前に、シベ語におけるアスペクト・ムード接辞とモダリティ接語について見ておく。シベ語のテンス・アスペクトについて、李樹蘭ほか (1984, 1986)、朝克 (2006)、張泰鎬 (2008)、薩蒙ほか (2011)、Zikmundová (2013) の諸先行研究はいずれも過去—非過去 (現在・未来) ないし過去—現在—未来というテンスの対立を認めているが、児倉 (2010b, 2013b) は、テンスの対立を認めず、代わりに実現した現実の事態か否かという現実 (realis) —非現実 (irrealis) のムードの対立を認めている。本論でも児倉 (2010b, 2013b) に従い、冒頭の表 1 に掲げたアスペクトとムードの体系を考える。

動詞の非現実形 (非現実の i 形) V-mi は以下のように、主語の習慣や属性、および未来の事態を表す。

- (2) žibeN nane nimɣa lawdu je-mi.  
 日本 人 魚 多い 食べる-IRR.NINF  
 <日本人は魚をよく食べる>
- (3) tere ucuN syaN ucule-mi.  
 3SG 歌 良く 歌う-IRR.NINF  
 <彼は歌がうまい (lit. 彼は歌を上手に歌う)>

- (4)        tere    cimare    isine-mi.  
           3SG    明日      到着する-IRR.NINF  
           <彼は明日到着する>

未来の事態を表す場合、主語の人称によっては話し手の意志を表すとも解釈可能な場合が存在する。

- (5)        tere    ji-me,      χoniN=we    emkeN    wa-mi.  
           3SG    来る-CVB   羊=ACC      1            殺す-IRR.NINF  
           <彼が来たら (私は) 羊を一頭殺す>

- (6)        bi        cimare    tacyqu=de    gene-mi.  
           1SG    明日      学校=DAT   行く-IRR.NINF  
           <私は明日学校に行く>

動詞の非現実形は習慣や属性を表す場合、現在のものと過去のものの両方を表すことが可能である。以下の (7) は、現在「彼」が現在も歌が上手いか否かとは関係なく、昔歌が上手であったということを表している。

- (7)        tere    daci'    ucuN    syaN    ucule-mi.  
           3SG    昔      歌      良く    歌う-IRR.NINF  
           <彼は昔歌がうまかった (lit. 彼は歌を上手に歌った)>

動詞の完了形 (完了の i 形) V-Xe=i と非完了形 (非完了の i 形) V-maxe=i は、いずれも個別的な事態として実現した、現実の事態を表す。以下の (8), (9) は、ある特定の状況で特定の日本人が魚をたくさん食べていたり、「彼」が上手に歌を歌っていることを表している。また、(10) は、ある特定の日に学校に行った、という話し手の行った一回的な行為を表している。

- (8)        tere    žibeN    nane    nimɣa    lawdu    je-maxe=i.  
           あの    日本    人      魚      多く    食べる-IMPFV=NINF  
           <あの日本人は魚をたくさん食べている>

- (9)        tere    ucuN    syaN    ucule-maxe=i.  
           3SG    歌      良く    歌う-IMPFV=NINF  
           <彼は上手に歌を歌っている>

- (10)      bi        cekse'    tacyqu=de    gene-Xe=i.  
           1SG    昨日      学校=DAT   行く-PFV=NINF  
           <私は昨日学校に行った>

完了形と非完了形のうち、特に非完了形は (8, 9) のような現在進行中の事態だけでなく、以下の (11) のように過去のある時点において進行中であった事態も表すことが可能である。

- (11) bi dyosi-maqe dyoNji-Xe=ŋe, tere ucuN syaN ucule-maxe=i.  
 1SG 入る-CVB 聞く-PFV=OINF 3SG 歌 良く 歌う-IMPV=NINF  
 <私が入って聞いたら、彼は上手に歌を歌っていた>

このように、先行研究でテンスの対立に関わるとされる要素のうち、特に非現実形 (V-mi) と非完了形 (V-maxe=i) は未来や現在だけでなく過去の事態も表すことが可能であることから、非現実形 (V-mi) と完了形 (V-Xe=i), 非完了形 (V-maxe=i) はテンスで対立するとはいえず、現実—非現実という事態の現実性と、現実のみ存在する完了—非完了の aspekto により対立すると考えられる。

### 3.2 モダリティ接語

次にモダリティ接語について見る。表 2 に示したように、シベ語にはモダリティ接語 =i と =ŋe という形式が存在し、動詞はこれらのモダリティ接語をとるか否かによって i 形, ŋe 形と単独形という 3 種類の形式をとる。これらの 3 種類の形式は、名詞修飾が可能か、単独で名詞節を形成することが可能か、という統語的性質も異なる<sup>4</sup>ものの、主に主節の述部に現れた際の意味で区別される。児倉 (2013a, b) は、2.2 で見た齊藤 (2006) の枠組みに基づき、これら 3 種類の形式の意味機能の違いを知識管理の観点から論じている。そして、モダリティ接語 =i は文の命題的内容を発話参加者の知識データベースへ新規に登録するという操作を、モダリティ接語 =ŋe は文の命題的内容を発話参加者の知識データベースから読み出すという操作を、モダリティ接語を持たない単独形は知識データベースの入出力にかかわる情報・知識の操作がないことを表す、としている。このとき、モダリティ接語 =i が表す、文の命題的内容を発話参加者の知識データベースに登録するという操作は、モダリティ接語 =i を述部にもつ文が対話において聞き手への情報伝達の機能を持つことから示される<sup>5</sup>。以下の (12, 13) において i 形は応答の発話に用いられるが、単独形は応答の文には用いられないことから、単独形は対話において聞き手への情報伝達の機能を持たないといえる。

<sup>4</sup> 児倉 (2013a, b) によれば、動詞の i 形, ŋe 形および単独形の統語的機能の違いは本節で論じる、それぞれの形式が表す知識管理の特徴から生じているとされる。モダリティ接語 =i や =ŋe の表す情報・知識の心的操作が生起することの可能な統語的単位に制約が存在するために、モダリティ接語をとらない単独形が連体節、名詞節と主節の述部というもっとも広い統語的環境に現れるのに対し、ŋe 形は連体節の述部に現れることができず、さらに i 形は連体節のほか、名詞節の述部にも現れることができず、専ら主節の述部のみ現れることが可能であるとされる。

<sup>5</sup> 聞き手に対する情報伝達の機能は、児倉 (2013b) によれば、i 形が文の命題的内容を聞き手の知識データベースに登録する、という情報・知識の操作を表し、i 形を述部に持つ文の発話に伴う発話内行為として聞き手に対し文の命題的内容を聞き手の知識データベースに登録する要求を行うことにより生じる、とされる。

(12) A: si jaqe je-Ke=i na.  
 2SG もの 食べる-PFV=NINF Q  
 <ご飯食べた?>

B: [je-Ke=i / ??je-Ke].  
 [ 食べる-PFV=NINF / 食べる-PFV ]  
 <食べた>

(13) A: sejeN ji-Xe=i na.  
 車 来る-PFV=NINF Q  
 <車, 来た?>

B: [ji-Xe=i / ??ji-Xe].  
 [ 来る-PFV=NINF / 来る-PFV ]  
 <来た>

情報提供の機能を持たない単独形は、詠嘆や回想に用いられる。

(14) syaN je-Ke.  
 よい 食べる-PFV  
 <(腹一杯食べたあとで) よく食べた…>

(15) sejeN teni' ji-Xe.  
 車 ようやく 来る-PFV  
 <(長い間待っていた車が来るのが見えて) 車がようやく来た…>

モダリティ接語 =*qe* は文の命題的内容が発話参加者の知識データベースから呼び出されるという知識管理を表すが、2.2の(1)でみた齊藤(2006)の仮定する知識管理のプロセスに従えば、知識データベースから呼び出された知識はバッファにおいて新規の情報との照合を受ける。このことから、*qe*形は*i*形と異なり、談話において新規の情報自体には用いられず、新規の情報を推論によって導くのに必要な、前提となる知識を伝達するのに用いられる。以下の(16)のBの発話は、Aの要求する、Aが携帯電話を持った(か否か)という情報を直接伝達するものであり、この発話では*qe*形は容認されない。これに対し以下の(17)では、AとBは夫婦であり、朝食に食べる نانを買うかどうかの問題となっている。このとき、Bが応答として伝達する「Bが(ナンを)買った」という情報はAの要求する情報ではないが、AはBの応答に基づき、「Bがナンを買っているなら今ナンを買う必要はない」ことを推論することが可能であり、Bの発話は間接的な応答として機能している。そしてこの発話では*qe*形が容認されるようになる。

(16) (Aは出かけるBに対し、携帯電話を忘れていないか確認する)



A: šeu#ji daile-Xe=i na.  
 携帯電話 持つ-PFV=NINF Q  
 <携帯電話持った?>

B: [ daile-Xe=i / ??daile-Xe=ŋe ].  
 [ 持つ-PFV=NINF / 持つ-PFV=OINF ]  
 <持った>

(17) (A と B はナンを売る屋台の前を通りがかった)

A: eneŋe laŋe#eweN gya-mi na.  
 今日 ナン 得る-IRR.NINF Q  
 <今日ナン買うか?>

B: [ ??gya-Xe=i / gya-Xe=ŋe ].  
 [ 得る-PFV=NINF / 得る-PFV=OINF ]  
 <買った (ので今は買わない)>

さらに、i 形と ŋe 形を比較すると、モダリティ接語 =i は単に知識データベースへの登録を表すため、i 形は当該の命題が知識データベースに既に存在するか否かを問わず機能しうるが、モダリティ接語 =ŋe は知識データベースに既存の知識の読み出しを表すため、ŋe 形で表される命題は発話の段階で既に知識データベース上に (読み出し可能な形で) 存在する必要がある。このことから、ŋe 形は以下の (18, 19) のように談話において話し手が (確信をもって) 知らない、あるいは覚えていない事柄には使えない。

(18) bi cekse' yamsxuN keneŋe oxtu [ ayimi-Xe=i / ??ayimi-Xe=ŋe ].  
 1SG 昨日 晩 おそらく 薬 [ 飲む-PFV=NINF / 飲む-PFV=OINF ]  
 <私は昨晚おそらく薬を飲んだ>

(19) A: dulu-Xe baruN=i ujui yeneŋe ya=de gene-Xe=ŋe.  
 過ぎる-PFV 週=GEN 1 番目の 日 どこ=DAT 行く-PFV=OINF  
 <先週の月曜日にどこに行った?>

(B は忘れたので手帳を見る)

B: ye#yaN=de [ gene-Xe=i / ??gene-Xe=ŋe ].  
 病院=DAT [ 行く-PFV=NINF / 行く-PFV=OINF ]  
 <病院に行った>

李樹蘭ほか (1984, 1986) は本論でいう完了を表す形式のうち、-Xe=ŋe (ŋe 形) が -Xe=i (i 形) や -Xe (単独形) と比べ、遠い過去を表すと述べている。実際、ŋe 形の -Xe=ŋe は生起して一定の時間が経過した出来事を表すことができるのに対し、発話現場において生起したばかりの出来事を表すことができないことから、少なくとも近い過去を表すことはできない、といえる。

- (20) (バスが去ってしまった後しばらくして、バスが来たかどうか尋ねられて)

sejeN [ yawe-Xe=i / yawe-Xe=ŋe ].  
 車 [ 去る-PFV=NINF / 去る-PFV=OINF ]  
 <車は去っていった>

- (21) (話し手と聞き手がバスを待っているところにバスが来た)

sejeN [ ji-Xe=i / ??ji-Xe=ŋe ].  
 車 [ 来る-PFV=NINF / 来る-PFV=OINF ]  
 <車が来た>

児倉 (forthcoming a) は、この現象を、完了の  $\eta e$  形 (V-Xe= $\eta e$ ) 自体が遠い過去というテンスを表すのではなく、完了の  $\eta e$  形の表す知識管理の特徴がテンス性に影響することにより生じたものであるとしている。モダリティ接語 = $\eta e$  は児倉 (forthcoming a) でも知識データベースに存在する知識を読み出しを表すとされているが、2.2 でも見たように、Chafe (1973) によれば命題が典型的な活性化を受ける、不活性の状態になるには、認識から一定の時間が必要であることから、モダリティ接語 = $\eta e$  は話し手が認識して間もない情報・知識には使えず、これが特に完了アスペクトと共に起する場合に遠い過去というテンス的として観察されるとしている。このように、知識管理の観点からのモダリティ接語 = $\eta e$  の分析は、先行研究が指摘した完了の  $\eta e$  形のテンス的特徴を説明可能である点でも有効である。

### 3.3 非現実におけるモダリティ接語 = $\eta e$ の使用の制約

3.2 で見たように、モダリティ接語 = $\eta e$  は話し手の知識データベースに存在する知識の読み出しという知識管理を表すが、ここで問題となるのは、動詞の  $\eta e$  形の中でも完了の  $\eta e$  形 (V-Xe= $\eta e$ ) と非完了の  $\eta e$  形 (V-maxe= $\eta e$ ) は主節の述部に現れることができるのに対し、非現実の  $\eta e$  形 (V-re= $\eta e$ ) がごく限られた場合を除き主節の述部に現れることができないということである。以下の (22) は非完了の例である。非完了も完了と同様、 $\eta e$  形が主節末に現れることが可能である。

- (22) A: mese yeneŋe ai je-mi. gya=de je-mi na.  
 IPL.INCL 昼 なに 食べる-IRR.NINF 街=DAT 食べる-IRR.NINF Q  
 <私達お昼何食べましょうか？ 外で食べましょうか？>
- B: oi te moN bo guruN fale-Xe eweN  
 INTJ 現在 IPL.EXCL 家 人々 発酵する-PFV ウウン  
 [ ??are-maxe=i / are-maxe= $\eta e$  ].  
 [ 作る-IMPFV=NINF / 作る-IMPFV=OINF ]  
 <おー、今うちのがファルグブン (lit. 発酵したウウン) 作ってるけど>
- A: tuttu o-ci da bi sefe=i bo=de gene-ki.  
 そのよう AUX-COND FOC 1SG 先生=GEN 家=DAT 行く-OPT

<それなら私先生の家に行きます>

以下の (23) における B の発話は非現実の例である。この発話はシベ人が一般的に犬の肉を食べない、という習慣 (タブー) を持つという知識を前提として、A の提案する料理を B は食べない、ということ推論させるものであるが、この文で非現実の *ŋe* 形は容認されない。

(23) (A とシベ人の B は一緒に食堂に入り、注文をしようとしている。A は B にある料理を食べるかどうか尋ねるが、その料理には犬の肉が入っている)

A: si ere=we je-mi na.

2SG これ=ACC 食べる-IRR.NINF Q

<おまえ、これ食べるか?>

B: oi, siwe' nane yonxuN yale [je=qu /??je=qu=ŋe].

INTJ シベ 人 犬 肉 [ 食べる=IRR.NEG / 食べる=IRR.NEG=OINF ]

<シベ人は犬の肉を食べないんだ>

また、以下の (24) における B の発話は、B が発話時まで決定していた、明日チャプチャルに行くという予定を前提として提示することで、B が明日 A の家に行かないことを推論させるものであるが、非現実の *ŋe* 形はこの文でも容認されない。

(24) (A と B は明日の予定を相談している)

A: si cimare gele moN bo=de ji-mi na.

2SG 明日 も 1PL.EXCL 家=DAT 来る-IRR.NINF Q

<おまえ、明日もうちに来るか?>

B: o, bi cimare cafcale=de [gene-mi /??gene-re=ŋe].

INTJ 1SG 明日 チャプチャル=DAT [行く-IRR.NINF / 行く-IRR=OINF ]

<あ、私明日はチャプチャルに行くんです>

一方で、以下の (25) のように非現実の *ŋe* 形が主節の述部で容認される場合も存在する。(25) は、A が路上で大きな荷物を背負って歩く B を見かけた、という状況での対話である。A は、B が大きな荷物を背負っていることから、B が遠い海外に行くところであると推論した上で B に尋ねたのに対し、B は近郊のチャプチャルに行くところであると応答している。

(25) A: si ere ai baite, eske am syanŋe migere-maqe,

2SG これ 何 事 こんなに 大きな スーツケース 背負う-CVB

tulere guruN=de gene-re=ŋe na.

外の 国=DAT 行く-IRR=OINF Q

<お前、これは何事か？こんなに大きな荷物を背負って。外国に行くのか？>

B: aqu, cafcale=i                   gucu bo=de   jaqe bene-me  
 ない チャプチャル=GEN 友人 家=DAT もの 送る-CVB  
 [ gene-mi                   / gene-re=ŋe ].  
 [ 行く-IRR.NINF   / 行く-IRR=OINF ]

<いや、(そうでは) ない、チャプチャルの友人の家に荷物を届けに行くのだ>

この例は、上の (23, 24) とは異なり、「(チャプチャルに) 行く」という B の行為が、発話時において既に進行中であり、少なくとも一部がすでに実現している。そしてこのことが非現実の  $\eta e$  形の使用を可能にしていると考えられる。3.2 で述べたように、モダリティ接語  $=\eta e$  が知識データベースからの知識の読み出しを表すとすると、(23, 24, 25) から、読み出しという心的操作を受けることが可能な形で存在する知識は、少なくとも一部が実現した事態に関するものであり、かつ生起してから (言語主体が認識してから)、一定の時間が経過しているものに限定されている、と考えられる。ここで問題となるのは、動詞の非現実形で表されるような、習慣や属性、意志や未来の事態に関する知識が言語主体の心内でどのように管理されているのか、ということである。3.2 で見たように、モダリティ接語  $=\eta e$  は知識データベースに存在する知識の読み出しを表すが、非現実形はモダリティ接語  $=\eta e$  と組み合わせられないことから、習慣や未来の事態は少なくともそのままの形式では、 $=\eta e$  による読み出しが可能な形で知識データベースに存在してはいないと考える必要がある。しかし、一方で習慣や未来の事態に関する知識が心的領域に存在しないというのは直観に反するように見える。そこで以下では、過去の習慣と、意志や未来の事態に関する文法形式の振る舞いを基に、非現実の事態に関する知識が心的領域に存在するのか、存在するとすればどのような形で存在するのか、という問題を論じていく。

#### 4. 非現実と知識管理：過去の習慣の場合

本節では、過去の習慣を表す文法形式の振る舞いを基に、過去の習慣に関する知識の心的領域におけるあり方について論じる。シベ語には存在を表す動詞 *bi* に関係する補助動詞 *bi-* が存在し、この補助動詞は話者による存在の認識を表す。例えば、動詞述語文において述部の動詞は単独では事態そのものを表すのに対し、動詞に補助動詞が後続すると、話し手による事態の認識 (発見) を表すようになる。

- (26) a. tere   jaqe   emgeri'   yawe-Xe=i.  
 あれ   もの   既に    去る-PFV=NINF  
 <あいつはもう去った>
- b. tere   jaqe   emgeri'   yawe-Xe   bi-Xe=i.  
 あれ   もの   既に    去る-PFV   AUX-PFV=NINF

<(「あいつ」の靴が玄関にないのに気付いて) あいつ, もう去っている>

(26b) は補助動詞 bi- が動詞の完了形に後続した例であるが, 補助動詞 bi- は動詞の副動詞形 (V-me) にも後続し, ある事態が未来において生起する予定であることに気付いたことを表す。

(27) a. tere jaqe cimare yawe-mi.

あれ もの 明日 去る-IRR.NINF

<あいつは明日去る>

b. tere jaqe cimare yawe-me bi-Xe=i.

あれ もの 明日 去る-CVB AUX-PFV=NINF

<(「あいつ」が明日去ることを初めて知って) あいつは明日去るのか>

また, 以下の (28) のように, 動詞の非現実形に後続し, ある習慣ないし属性に気付いたことを表す場合もある。

(28) a. siwe' nane jonxuN yale je=qu.

シベ 人 犬 肉 食べる=IRR.NEG

<シベ人は犬の肉を食べない>

b. siwe' nane jonxuN yale je=qu bi-Xe=i.

シベ 人 犬 肉 食べる=IRR.NEG AUX-PFV=NINF

<シベ人は犬の肉を食べないのか>

補助動詞 bi- の完了形 biXe (bi-Xe) はモダリティ接語 =ŋe をとることも可能である。そして, 特に前に現れる動詞が非現実ムードに対応する副動詞形 V-me の場合に, 文は過去の習慣を表しうる。

(29) bi daci' ayrke=we xene aymi-me bi-Xe=ŋe,

1SG 昔 酒=ACC とても 飲む-CVB AUX-PFV=OINF

te aymi-me mutu=qu o-Xe=i.

現在 飲む-CVB できる=IRR.NEG なる-PFV=NINF

<私は昔は酒をととても(多く)飲んでいたが, 今は飲めなくなった>

(30) tere jaqe ajige eriN=de ye#li bira=de efse-me bi-Xe=ŋe.

あれ もの 小さい 時=DAT イリ 河=DAT 泳ぐ-CVB AUX-PFV=OINF

<あいつは小さい時, イリ河で泳いでいた>

しかし、副動詞 V-me に後続する bi-Xe=ŋe は未来の事態を表すことはできない。

- (31)    ??bi    cimare    caŋcale=de                    gene-me    bi-Xe=ŋe.  
           1SG    明日        チャプチャル=DAT    行く-CVB    AUX-PFV=OINF  
           (私は明日チャプチャルに行くのだ)

このように、動詞の非現実形で表される過去の習慣は、動詞の非現実形だけでなく補助動詞 bi- の完了の ŋe 形 (bi-Xe=ŋe) によっても表され、この時、動詞はモダリティ接語 =ŋe をとることができるようになる。しかしこのとき、モダリティ接語 =ŋe が後続しているのはあくまで補助動詞 bi- (の完了形 bi-Xe) であり、動詞が直接モダリティ接語 =ŋe を取っているわけではない。これらの現象は、シベ語の言語現象から見る限り、過去の習慣に関する知識が習慣という非現実の事態ではなく、話し手の認識した個々の事態という現実の事態に関する知識の形で存在する、と考えれば矛盾なく説明することが可能になる。(29) から (31) のように、bi-Xe=ŋe は過去の習慣を表すことは可能であるが、未来の事態を表すことはできない。このことは、過去の習慣は既に実現した個別的な事態としても認識可能であるが、反対に未来の事態は実現した事態ではありえず、現実の事態として認識することが不可能であるためであると考えられる。

## 5. 非現実と知識管理：未来の事態の場合

次に、意志ないし未来の事態を表す文法形式の振る舞いを基に、未来の事態に関する知識の心的領域におけるあり方について論じる。結論から述べると、シベ語では一般的な事象構造として、事態そのものの生起の前段階としての「意志」ないし「予定」を仮定し、未来の事態については、この「意志」ないし「予定」のみが知識として知識データベースに存在しうる、とすることにより、シベ語の文法形式の機能を体系的に捉えることが可能になる。以下ではまず、補助動詞 o- (なる), aci- (動く), dudu- (横たわる), seNda- (放つ・置く) の使用の条件から、「意志」ないし「予定」に関する知識の存在を仮定する必要性を論じ、次いで補助動詞 se- (言う) の特徴から、「意図」ないし「予定」のみが知識データベースに存在し、読み出しが可能である、ということを論じる。

### 5.1 補助動詞 o-

補助動詞 o-, 特に完了の i 形の o-Xe=i は李ほか (1986) において未来のテンスを表すとされている形式である。児倉 (2010a) は、o-Xe=i はテンス的には近接未来を表すが、事態が実現するという話し手の判断を表す形式であるとしている。以下の (32) では、話し手の聞き手の家から帰るという行為はまだ実現していないものの、話し手は聞き手の家から帰るという判断を下したということが表される。

(32) (話し手は聞き手の家を訪問し、帰ろうとしている)

bi yawe-me o-Xe=i.

1SG 去る-CVB AUX-PFV=NINF

<私はそろそろ帰ることにします>

この補助動詞 *o-* の意味は、知識管理から、非現実の事態に関する「意志」ないし「予定」を知識として認めることで、他の補助動詞を含め体系的な記述が可能になる。疑問文の場合、動詞の非現実形 (*V-mi*) と補助動詞の *o-Xe=i* は共に発話時以降に行われる行為、ないし発話時以降に生起する事態を表すが、このとき、動詞の非現実形は既に意志あるいは予定が定まった行為ないし事態を表すのに対し、*o-Xe=i* は未だ意志あるいは予定が定まっていない行為ないし事態を表す。以下の (33a, b) は、ともに話し手と聞き手が何を食べるかを聞き手に尋ねる発話であるが、発話の状況から、(33a) では、話し手と聞き手が既に何を食べるかの予定が定まっており、聞き手のみがそれを知っているという状況で、その予定を尋ねているのに対し、(33b) では、話し手と聞き手が何を食べるかという予定はまだ定まっておらず、話し手はこれから聞き手と相談して何を食べるかを決めるために聞き手の意志を尋ねている。

(33) a. (話し手はツアーに参加しており、ガイドである聞き手に昼食の予定を尋ねる)

mese ai [je-mi /je-me o-Xe=i].

1PL.INCL なに [食べる-IRR.NINF /食べる-CVB AUX-PFV=NINF]

<私達、何を食べるの？>

b. (話し手は聞き手と一緒に食事をしようと食堂に入り、何を食べるか聞き手と相談している)

mese ai [je-mi /je-me o-Xe=i].

1PL.INCL なに [食べる-IRR.NINF /食べる-CVB AUX-PFV=NINF]

<私達、何を食べようか？>

このように、疑問文の場合、動詞の非現実形 *V-mi* は、発話時において実現はしていないものの、予定が定まっている事態を尋ねるのに対し、*o-Xe=i* は、発話時において予定が定まっていない事態を表す。これは、平叙文の場合でも同様である。以下の (34a, b) における B の発話は、ともに B が (チャプチャルに) 行かない、という同一の命題的内容を表しているが、(34a) は、B がチャプチャルに行く予定がない、ということを表しているのに対し、(34b) は発話時の状況を踏まえ、当初の予定を変更し、当初の予定になかった、B がチャプチャルに行かないということを新たに決断した、ということを表している。

(34) a. A: cimare tese=i bo=de gene-mi na.  
明日 3PL=GEN 家=DAT 行く-IRR.NINF Q

<明日、彼らの家に行くか？>

B: bi [ gene=qu / ??gene=qu o-Xe=i ].  
 1SG [ 行く=IRR.NEG / 行く=IRR.NEG AUX-PFV=NINF ]  
 <行かない>

b. (Bは車に乗ってチャプチャルに行こうとしている)

A: sejeN=de nane jalne-Xe=i se-re.  
 車=DAT 人 一杯になる-PFV=NINF 言う-IRR  
 <車は満員だって (車に人が一杯になったって)>

B: teraje o-ci da bi  
 そんな AUX-COND FOC 1SG  
 [ ??gene=qu / gene=qu o-Xe=i ].  
 [ 行く=IRR.NEG / 行く=IRR.NEG AUX-PFV=NINF ]  
 <それなら私行かないことにする>

このように、動詞の非現実形 V-mi と補助動詞 o- はともに発話時において実現していない事態を表すが、補助動詞 o- の機能を動詞の非現実形と比較すると、補助動詞 o- は発話時点で定まった意志や予定を表さないという特徴があることから、発話時において定まった意志や予定が存在するか否かが文法形式の使い分けにかかわっており、これらの形式の違いを説明するためには、何らかの形で、発話時において実現していない事態の予定に関する知識の存在を仮定する必要がある。

## 5.2 補助動詞 aci-, dudu-, seNda-

意志ないし予定に関する知識は、既の実現した事態に対しても想定することが可能である。補助動詞 aci- (動く), dudu- (横たわる), seNda- (放つ・置く) は共通して話し手の意図しない行為に用いられ、それぞれ事態の開始・継続・終結という局面を表す。

(35) bi uju xulyxi-me aci-Xe=i.  
 1SG 頭 ふらふらする-CVB AUX-PFV=NINF  
 <私は頭がふらふらし出した>

(36) bi sade-maqe dudu-Xe=i.  
 1SG 疲れる-CVB AUX-PFV=NINF  
 <私は疲れている>

(37) bi tere=i gewe=we onju-maqe seNda-Xe=i.  
 1SG 3SG=GEN 名前=ACC 忘れる-CVB AUX-PFV=NINF  
 <私は彼の名前を忘れてしまった>

5.1 では、補助動詞 o- の意味機能を論じる際に、発話時において実現していない事態であ



っても、それに関する予定が情報ないし知識として存在すると論じた。これと同様に本節では、発話時において実現している事態についても、話し手がその事態の実現に関する情報・知識をあらかじめ持っていたか（つまり、事態の実現が話し手の予定にあったか）ということが言語形式の選択にかかわることを示す。児倉 (forthcoming b) は、これらの補助動詞が共通して実現した事態を表してはいるが、いずれも意図しない行為、ないし話し手が予期せずに生じた事態を表すという共通点があると論じている。以下の (38) から (40) は、これらの補助動詞が話し手の意志的な行為に用いられないことを表している。

- (38) bi xwise gisuN taci-me [ diriwe-Xe=i / ??aci-Xe=i ].  
 1SG ウイグル 語 学ぶ-CVB [ 始める-PFV=NINF / AUX-PFV=NINF ]  
 <私はウイグル語を学び始めた>
- (39) bi bitke' [ ta-maxe=i / ??ta-maqe dudu-Xe=i ].  
 1SG 本 [ 読む-IMPV=NINF / 読む-CVB AUX-PFV=NINF ]  
 <私は本を読んでいる>
- (40) bi moru=we [ owu-me waje-Xe=i / ??owe-maqe seNda-Xe=i ].  
 1SG 碗=ACC [ 洗う-CVB 終わる-PFV=NINF / 洗う-CVB AUX-PFV=NINF ]  
 <私はお碗を洗い終えた>

これらの補助動詞は他者 (3 人称主語) の行為については、主語の意志的な行為を表す場合にも用いることが可能である。

- (41) miN xaɣeji gisuN [ gisere-me diriwe-Xe=i / gisere-me aci-Xe=i ].  
 1SG.GEN 息子 言葉 [ 話す-CVB 始める-PFV=NINF / 話す-CVB AUX-PFV=NINF ]  
 <私の息子は言葉をしゃべりだした>
- (42) tere bitke' [ ta-maxe=i / ta-maqe dudu-Xe=i ].  
 3SG 本 [ 読む-IMPV=NINF / 読む-CVB AUX-PFV=NINF ]  
 <彼は本を読んでいる>
- (43) tere moru=we [ owu-me waje-Xe=i / owe-maqe seNda-Xe=i ].  
 3SG 碗=ACC [ 洗う-CVB 終わる-PFV=NINF / 洗う-CVB AUX-PFV=NINF ]  
 <彼はお碗を洗い終えた>

しかし、他者の行為・事態に用いられる場合、その行為は話し手にとって予定されていない、予想外のものである必要がある。

- (44) a. (天気予報の雨予報をみて、傘を持って出かけている)

aɣa da-me [ diriwe-Xe=i /??aci-Xe=i ].  
 雨 降る-CVB [ 始める-PFV=NINF / AUX-PFV=NINF ]  
 <雨が降り始めた>

b. (天気予報の雨予報をみて、傘を持って出かけている)  
 aɣa da-me [ ?diriwe-Xe=i / aci-Xe=i ].  
 雨 降る-CVB [ 始める-PFV=NINF /AUX-PFV=NINF ]  
 <雨が降り始めた>

(45) a. χunχu eriN amele gele bitke' ta-maxe=i ba seme dyaNχwa  
 半 時間 後 また 本 読む-IMPV=NINF INF COMP 電話  
 taNde-Xe=ɲe, gele [ ta-maxe=i /??ta-maqe dudu-Xe=i ].  
 打つ-PFV=OINF も [ 読む-IMPV=NINF / 読む-CVB AUX-PFV=NINF ]  
 <30分後にまだ本を読んでいるだろうと電話をかけたが、(予想通り) まだ本を読ん  
 でいる>

b. bitke' ta=qu o-Xe ba seme dyawere dyaNχwa tande-Xe=ɲe  
 本 見る=IRR.NEG AUX-PFV INF COMP 夜 電話 打つ-PFV=OINF  
 gele bitke' [ ?ta-maxe=i / ta-maqe dudu-Xe=i ].  
 また 本 [ 見る-IMPV=NINF / 見る-CVB AUX-PFV=NINF ]  
 <(もう) 本を読むのをやめただろうと夜電話をかけたらまだ本を読んでいる>

(46) a. tere eneɲe gele eme χunχaN=de da  
 3SG 今日 また 1 杯=DAT FOC  
 [ soχtu-Xe=i /??soχtu-maqe seNda-Xe=i ].  
 [ 酔う-PFV=NINF / 酔う-CVB AUX-PFV=NINF ]  
 <彼は今日もまた盃1杯で酔っ払った>

b. tere eneɲe ane-Xe=i, eme χunχaN=de da  
 3SG 今日 どうする-PFV=NINF 1 杯=DAT まさに  
 [ ?soχtu-Xe=i /soχtu-maqe seNda-Xe=i ].  
 [ 酔う-PFV=NINF / 酔う-CVB AUX-PFV=NINF ]  
 <彼は今日はどうしたんだ？盃1杯で酔っ払ってしまった>

これらの例から、補助動詞 aci-, dudu-, seNda- は共通して、話し手の予定になかった事態について用いられ、その開始・継続・終結という局面を表しているといえる。これは主語の人称により、主語 (=話し手) の意志ないし話し手の予測がない、ということが使用の条件になっており、このことから、実現した現実の事態についても、事態の実現に先立った話し手の意志ないし予定に関する知識の有無が補助動詞の使用に関わっているといえる。

## 5.3 補助動詞 se-

5.1 と 5.2 で見たように、シベ語に存在する補助動詞 o- と、aci-, dudu-, seNda- は共通して話し手の意志の有無、予定の有無が使用に関わっており、このことから非現実の事態であってもその実現に関する意志ないし予定が知識として存在しうるといえる。シベ語にはこの意志ないし予定のみを表す形式も存在する。動詞 se- は他の動詞に後続し、補助動詞として行為に先立つ意志 (～しようとする) を表す。

- (47) bi duliNkyani gele ji-me se-Xe=ŋe, am baite  
 1SG 去年 も 来る-CVB AUX-PFV=OINF 大きな 事  
 tici-maqe ji-me mutu-Xaqu=i.  
 出る-CVB 来る-CVB できる-PFV.NEG=NINF  
 <私は去年も来ようとしたが、大事が発生して来ることができなかった>

また補助動詞 se- は事態そのものが生起したことを必ずしも含意しない。

- (48) a. \*tere χoniN=be wa-Xe=ŋe, χoniN buce-Xaqu=i.  
 3SG 羊=ACC 殺す-PFV=OINF 羊 死ぬ-PFV.NEG=NINF  
 (彼は羊を殺したが羊は死ななかった)  
 b. tere χoniN=be wa-me se-Xe=ŋe, χoniN buce-Xaqu=i.  
 3SG 羊=ACC 殺す-CVB AUX-PFV=OINF 羊 死ぬ-PFV.NEG=NINF  
 <彼は羊を殺そうとしたが、羊は死ななかった>

ここまでの例は後件が過去において生起しなかった事態を表していたが、以下の (48) のように、発話時においてまだ実現していない事態について、主語の意志を表す場合も存在する。

- (49) tere jaqe cimare cafcalle=de gene-me se-maxe=ŋe.  
 あの もの 明日 チャプチャル=DAT 行く-CVB AUX-IMPV=OINF  
 <あいつ、明日チャプチャルに行くと言っている>

(49) は実現していない事態 (行為) に関する主語の意志を表しているが、この文で =ŋe が容認されることから、モダリティ接語 =ŋe が表す読み出しの操作を受ける対象として主語の意思も存在しうる、といえる。

本節で見てきたことをまとめると、まず 5.1 と 5.2 で見た補助動詞 aci-, dudu-, seNda-, o- は共通して事態が生起が話し手の予定にないこと、あるいは、行為を行う意志を持たないことを表し、aci-, dudu-, seNda- と o- は事態が実現したか否かで区別される。このことは以下の表3のようにまとめられる。

表3 補助動詞 aci-, dudu-, seNda-, o- の機能

	現実	非現実
予測・意志あり	-Xe / -maxe	-mi
予測・意志なし	aci- / dudu- / seNda-	o-

シベ語では話し手の予測ないし意志という要素を仮定することが有用であり、これは行為を行う意志のみを表す補助動詞 se- の存在からより直接的に示される。

## 6. おわりに

以上、本論では、知識データベースからの情報の読み出しを表すモダリティ接語 =qe が非現実と共起しないという現象を基に、シベ語における習慣、意志、未来など非現実の事柄に関する情報・知識の心内におけるあり方について論じた。本論の結論は以下のようにまとめられる。

- ① 既に知識データベースに存在している知識の読み出しを表すモダリティ接語 =qe は、動詞の完了形 (V-Xe) と非完了形 (V-maxe) には後続しうるが、非現実形 (V-re) には後続しないことから、現実の事態についてのみ用いられ、非現実の事態には用いられない。このことから知識データベース内に習慣や未来の事態など、非現実の事態に関する知識は、少なくともモダリティ接語 =qe が表す読み出しが可能な形では存在しないと考えられる。
- ② 過去の習慣は、動詞の非現実形 V-mi 以外に補助動詞 bi- の完了 qe 形 bi-Xe=qe によっても表わされ、モダリティ接語 =qe はこの形式には出現可能である。補助動詞 bi- は話し手による事態の存在の認識を表すことから、習慣のうち、過去の習慣に関する知識として、話し手による認識の形で読み出し可能な知識が存在すると考えられる。
- ③ 補助動詞 o- と aci-, dudu-, seNda- は話し手に事態の生起の予定がなかった、あるいは特に1人称主語の話し手の意志を介さず (意図せず) に生起した事態を表す。また、補助動詞 se- は事態の実現に対する話し手の意志を表す。これらの補助動詞の意味から、未来の事態に関しては、その生起の予定や、意志の形で読み出し可能な知識が存在すると考えられる。

このように、モダリティ接語 =qe は習慣、属性や未来の事態に関するものでは話し手が認識した過去の習慣や未来の事態に関する予定、意志など、一貫して話し手が経験したものに用いられており、シベ語の場合、=qe による読み出しが可能な知識は話し手が経験したものに限られるといえる。これは田窪・金水 (1996) の論に従えば、本稿において知識データベースからの情報の読み出しを表すとしたモダリティ接語 =qe の機能は直示的指示に相当する可能性があるが、日本語をはじめとする他の言語との対照を含め、この議論は稿を改めて行いたい。

## 略号一覧

1: 1 人称	CVB: 副動詞	INF: 推量	PFV: 完了
2: 2 人称	DAT: 与格	INTJ: 間投詞	PL: 複数
3: 3 人称	EXCL: 除外	IRR: 非現実	Q: 疑問
ACC: 対格	FOC: 焦点	NEG: 否定	SG: 単数
AUX: 補助動詞	GEN: 属格	NINF: 新情報	
COMP: 補文標識	IMPFV: 非完了	OINF: 旧情報	
COND: 条件	INCL: 包括	OPT: 希求	

## 参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. New York: Oxford University Press.
- Chafe, Wallace (1973) Language and memory. *Language*. 49: 261-281.
- (1986) Evidentiality in English Conversation and Academic Writing. In. Chafe, Wallace, Nichols, Johanna (eds.) 261-272.
- (1994) *Discourse, Consciousness and Time*. Chicago: The University of Chicago Press.
- (1995) The Realis-Irrealis Distinction in Caddo, the Northern Iroquoian Languages, and English. In. Joan Bybee and Suzanne Fleischman (eds.) *Modality in Grammar and Discourse*. 349-365. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Chafe, Wallace, Nichols, Johanna (eds.) (1986) *Evidentiality: the linguistic coding of epistemology*. Norwood, New Jersey: Ablex Publishing Corporation.
- 朝克 (2006) 『現代錫伯語口語研究』北京：民族出版社。
- 児倉徳和 (2010a) 「シベ語の動詞 o- について」呉人恵編『環北太平洋の言語』15: 117-130. 富山大学人文学部。
- (2010b) 「シベ語の動詞接尾辞 -mi, -Xe, mahei について—アスペクトと時間ダイクシスの体系—」, 『東京大学言語学論集』30: 93-113. 東京大学人文社会系研究科・文学部言語学研究室。
- (2013a) 「シベ語の三つの動詞完了形 -Xe, -Xeŋe, -Xe の機能と節の階層：なぜ -Xe のみが連体用法を持つのか？」『北方言語研究』3: 155-174. 北海道大学大学院文学研究科。
- (2013b) 「シベ語のアスペクト・モダリティの研究—知識状態の変化にもとづく体系化」東京大学博士論文。
- (forthcoming a) 「シベ語におけるテンスとモダリティ—特に「過去」のテンス性について—」
- (forthcoming b) 「論錫伯語助動詞構成的意願性範疇」
- Kubo, Tomoyuki (2008) A sketch of Sibe phonology. 寺村政男・久保智之・福盛貴弘編『言語の研究—ユーラシア諸言語からの視座—』(『語学研究フォーラム』16): 127-142. 大東文化大学。

- 久保智之・児倉徳和・庄声 (2011) 『2011 年度言語研修テキスト 1 シベ語の基礎』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 李樹蘭・仲謙・王慶豊 (1984) 『錫伯語口語研究』北京：民族出版社.
- 李樹蘭・仲謙 (1986) 『錫伯語簡誌』北京：民族出版社.
- Mithun, Marianne (1999) *The Languages of Native North America*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- 齊藤学 (2006) 「自然言語の証拠推量表現と知識管理」博士論文, 九州大学.
- 薩蒙, 伊爾罕芝, 郭向陽, 謝巍 (2011) 『錫伯語通論』烏魯木齊：新疆人民出版社.
- 田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3(3): 59-74. 日本認知科学会.
- 張泰鎬 (2008) 『錫伯語語法研究』昆明：雲南民族出版社.
- Zikmundová, Veronika (2013) *Spoken Sibe: Morphology of the Inflected Parts of Speech*. Prague: Carolinum Press.

## “Irrealis” in Terms of Knowledge Management: The Case of Sibe

Norikazu Kogura  
koguran@aa.tufs.ac.jp

Keywords: Irrealis, Knowledge management, Activation, Auxiliaries, Sibe (Tungusic)

### Abstract

The present article argues the mental status of the knowledge about irrealis states of affairs such as habits, future events, and intention within the knowledge space (or memory) of humans. Many studies on evidentiality and epistemicity suggest some type of mental processing of information and knowledge within the knowledge space of humans. One such type involves activation, which is referred to by Chafe (1973, 1994). For Sibe, Kogura (2013a, b) suggested that a modal particle =ŋe stands for this activation of knowledge that is already in the knowledge space of humans. However, this particle =ŋe can only follow the perfective (V-Xe) and imperfective (V-maxe) but not irrealis (V-re); thus, in Sibe, the mental processing of activation can only be applied for knowledge about realis states of affairs. Based on this analysis, the present article explores the mental status of knowledge about irrealis states of affairs; it argues that knowledge about past habits is stored in the knowledge space as each actual occurrence of a habit, and that of future events is stored as intentions or plans for the occurrence of future events.